

無症候性除脈は心臓血管病や死亡リスクと関連しない

特定の集団においては、除脈は心臓血管病の低リスクと関連するが、中高年の一般集団での心拍数 50 拍/分（以下、bpm）未満の除脈と臓血管病および死亡リスクとの関係についてはよくわかっていない。本研究では、心臓血管病のない 45～84 歳の男女 6,733 例を 10 年間追跡し、除脈と心臓血管病および死亡リスクとの関係を調査した。

対象者のうち、心拍数調節薬を使用していない 5,831 例の平均心拍数は 63bpm で、5.3% が心拍数 50bpm 未満の除脈であった。予備解析の結果から、心拍数調節薬による死亡リスクへの有意な相互作用 ($P=0.002$) がみられたため、その後の解析は心拍数調節薬の非使用群と使用群で層別化して行った。その結果、心拍数 50bpm 未満の除脈は心拍数調節薬使用群、非使用群のいずれにおいても心臓血管病との有意な関係はみられなかった。死亡リスクについては、心拍数調節薬非使用群では心拍数 60～69bpm 群と比べ、50bpm 未満群で有意差はなかった（ハザード比 0.71、 $P=0.12$ ）が、80bpm 超群では有意な上昇がみられた（同 1.49、 $P=0.01$ ）。一方、心拍数調節薬使用群では、心拍数 60～69bpm 群と比べ、50bpm 未満群（ハザード比 2.42、 $P=0.002$ ）、80bpm 超群（同 3.55、 $P=0.001$ ）の両方で死亡リスクの有意な上昇が認められた。

したがって、一般集団において、心拍数調節薬の使用者では除脈による死亡リスクが有意に高かったが、無症候性除脈は心臓血管病や死亡リスクとは関連しないことが示された。

出典：Journal of American Medical Association. Internal Medicine. 2016; 176:
219-227